

基地のそばで暮らすということ

～今、本土のわたしたちに問われていること～

語り部・明 有希子（あきら ゆきこ）さんの話を聞いて

3 月 15 日（土）、東京 Y W C A 会館

基地のそばで暮らす

沖縄戦以前は、現在の宜野湾市の中心に宜野湾村役場や宜野湾国民学校があり琉球松の宜野湾並松街道が首里まで続いていた。いまは宜野湾市の真ん中を普天間飛行場が占め夜も夕方のようにオレンジ色に明るい空が日常になった。ここで生まれ育った有希子さんは幼い頃、お祖父さんに「どうして明るいのか？」と尋ねたが、40 年たって娘から同じ質問を受けたという。お祖父さんは沖縄戦の兵士で家族のなかでたった一人生き残り、有希子さんのお父さん兄弟が生まれた。お父さんは復帰まえに県外の大学へ行きパスポート（「日本渡航証明書」）を持っていることで「沖縄から来たんだろう」と偏見を受けたそうだ。

宜野湾市の 29.4% が米軍基地。米軍機の飛行には日米間の取り決めがあり、保育園・学校などの上空は飛行ルートでないのに守られない。2017 年に娘さんが通う緑ヶ丘保育園の屋根に米軍ヘリ CH-53 の部品が落下した。その 6 日後、普天間第二小学校の校庭に CH-53E 型ヘリの 7.7 kg の窓が落下した。保育園上空の飛行禁止と事故原因の究明を求める「嘆願書」を父母会を中心に作成し署名を集め何度も政府交渉をした。いまでも学校上空の飛行禁止を要請している。

本土と沖縄の立ち位置を考える

本土と沖縄の立ち位置を皆さん一人ひとりに考えてもらいたい、自分たちの足元を見直してほしいと、有希子さんは、日本の国土面積 0.6% の沖縄に国内の米軍専用施設の 70% を負担させていることを、47 人クラスのランドセル 47 個に例えて図示された。沖縄さん 1 人に 33 個のランドセルを持たせている現状の図。青森さん 4.5 個、東京さんと神奈川さんが 2.5 個ずつ…。「日米安保条約による米軍基地を平等に負担すべき」という議論は進まない。安倍晋三首相(当時)は 2018 年 2 月の衆院予算委員会で、沖縄にある米軍基地の県外移設が実現しない理由について「移設先となる本土の理解が得られない」と答弁している。

「父母による自作自演」、「子どもを盾にして平和運動をするな」とい

う分かりやすい攻撃・誹謗中傷だけでなく、無意識な無自覚な攻撃＝マイクロアグレッションがあると有希子さんは続けた。デモなどで見かける「沖縄の闘いに連帯する」「沖縄にいないものはどこにもいない」というアピールや「辺野古ツアー」の呼びかけに触れるたびに、70%の基地を押し付けている本土の人たちが言うことなのか疑問になってきたと、有希子さんは言われる。

わたしたちができること

有希子さんは沖縄で生まれ育った。加重的な基地負担があり、米軍機の騒音と危機避難で保育・授業が中断され学ぶ権利が奪われる。空から危険な物が降ってくる。街には屈強な米兵がいて毎週末に事件事故を起こし、性的暴力や殺人が続く。そんな中で有希子さんは暮らしている。

有希子さんの話を聞いてわたしたちは、沖縄に70%の基地を負担させ全く減らせていないこと、普天間飛行場の代替として辺野古・大浦湾の工事を進めていること、今また那覇軍港の移設先として浦添西海岸を埋め立てる計画も、「沖縄が抱える基地問題」ではなく「日本が抱えて沖縄に押し付けている日本の米軍基地問題」だと改めて思う。

本土の人たちができると、沖縄の人ができることは違う。本土の人にしかがんばれないこと、本土でしか考えられない問題があると、有希子さんも言われた。

「政治を変える。圧倒的に人数の多い本土から変える。自分たちの自治体を変える。半径5メートルから変える」と有希子さんに励まされた。

今年3月もニューヨークでCSW69(The Commission on the Status of Women;第69回国連女性の地位委員会)が開催され、日本YWCAパレルイベント「脅威のもとで暮らす 在日米軍基地問題を共に考える」を沖縄、長崎、京都、名古屋、東京の各YWCAのユースが発表した。沖縄の声として基地があるがゆえの騒音被害、事件事故、レイプ事件を伝え、植民地主義、日米地位協定を考えていく取り組みが報告された。これから各地で報告されることと思う。

さまざまな力を合わせてヤマトでしかできないことに取り組んでいきたい。

(平和と正義委員会 チーム「月桃の会」)